

おばあちゃんへのおみやげ

松田妙子

認知症の母が入所している施設のはからいで、父と姉と私と母との四人で初詣をしました。車いすの母は終始御機嫌でした。日頃は施設の外へ出る機会も少ないので、久々の「お出かけ」が嬉しかったのでしよう。駄菓子や玩具の屋台に喜びながら、「おばあちゃんにおみやげを買って帰らな」と何度も言うのです。「おばあちゃん」とは多分、私の祖母(母の姑)のことでしょう。もう三十年も前に亡くなった人を、生きているかのように言うこと自体、認知症の証拠ですが、私の母がこの楽しい「お出かけ」の際に、「おばあちゃんのおみやげ」を気にしていることが意外でした。

嫁と姑の確執を見せつけられて育った私は、祖母が大嫌いでした。私を可愛がってくれないという思いもありましたが、「お母ちゃんをいじめる奴は許せない」気持ちも強かったです。祖母が死んだ時も、少しも悲しくはありませんでした。人の死を悲しくない自分を恥じて、祖母の葬式には、何とか悲しい気分を絞り出そうと苦心したものです。

祖母は最晩年、殆ど寝たきりでしたが、トイレだけは自力で行くほど、氣丈で自尊心の強い人でした。でも私は、祖母がトイレを汚すたび、激しくなりました。若い私と、年老いて体の不自由な祖母。どちらが弱者なのかは、一目瞭然なのに。ましてや人並み以上に自尊心の強い祖母には、どれほど残酷な仕打ちであったことか。それを十分に自覚しながら、私は憎悪の爆発を止められませんでした。それが私の、生涯悔いてやまぬことの一つです。私はこの罪を、死ぬまで負わなければならないのだ、と思つています。

聞いた話では、祖母の姑にあたる人の、祖母に対する仕打ちも、それはそれは酷かったそうです。祖母は「姑と同じ墓には入りたくない」と遺言して、わざわざ別のお墓を建てさせたほどです。そんな祖母が、自分が姑として若い嫁を迎えた時、どんな気持ちだったことでしょう。嫁姑の争いなんて、ざらにあることと言いつたのは簡単です。でも祖母にとっては一度きりの人生を、誰かに踏みじられたという思いは、生涯消せぬものだったのです。

けれど私の母は、そんな「負の連鎖」をいともやすやすと断ち切ってくれたのです。老いてこわれた母の心の中で、どんな作用が起きていたのかはわかりません。でも久々の「お出かけ」、しかもお正月の初詣という特別な日に、いそいそと「おばあちゃんへのおみやげ」を買いたがるほど、祖母は母にとって大事な人になっていたのです。

私は母が、私の罪をかわりに担ってくれたかのような気がしました。私の罪も悔恨も、祖母の姑への憎悪も、私の母はその壊れた心の中で見事に浄化してくれた。母はとつとに祖母を許している。「同じ墓に入りたくない」と遺言を残すほど、誰かを激しく憎めるような人であった祖母も、母の中ではいつの間にか「優しいおばあちゃん」に生まれ変わっている。しわだらけの童顔で、無心に微笑む母を見ると、少なくとも私などよりは、ずっと仏様に近い所にいるように感じられたのです。老いて壊れた人が笑みを見せる時、どれほど私たちに心が救われることか。

これが私の、初詣のみやげ話です。



